
プロジェクト報告

「近代中国仏教と国民国家」報告書

陳 継 東

二十世紀以降の中国仏教は、激動する近代中国社会の中で大きく変貌してきた。伝統の連続と断絶、破滅と再生という課題は、中国仏教がその出口を見出すために常に直面せざるを得なかった現実問題であった。本研究プロジェクトでは、三つの視点からその歴史的軌跡を考察する。①近代国民国家との関係、②ナショナリズム形成とのかかわり、③日本仏教との交流である。この三つの視点から、中国仏教の伝統的存在から現代的あり方への変容過程を明らかにし、その近未来の方向性を展望することを目的とした。そのため、アメリカ、カナダ、日本、中国から延べ八名の研究者を招聘し、二回にわたり講演会を開催した。

第一回講演会は、令和六年（二〇二四年）七月二二日（月）、本学八号館四階国際研究センター会議室において「近現代中国仏教と国民国家」をテーマに開催された。最初に登壇したのは、カナダ・マギル大学（McGill University）ライ・ロンダオ（Rongdao Lai）准教授であり、続いてアメリカ・マイアミ大学（University of Miami）のジャスティン・リッツィンガー（Justin Ritzinger）准教授が発表した。それぞれの発表にコメントを加えたのは、日本・東北大学ポストドクターの張莉紗（Lisha Zhang）博士である。

ライ・ロンダオ氏は、「The Dharma Lineage Network and International Dissemination of Modern Chinese Buddhism（法脈系譜ネットワークと現代中国仏教の越境的伝播）」を題として発表した。本報告は現代中国仏教の国際的ネットワークに新たな視点を提示しており、掘り下げて検討すべき特徴をいくつか備えている。

まず、伝統的叙述モデルの突破である。本報告は、太虚大師を中心とする従来の叙述モデルから脱却し、地域性と多様性に焦点を移している。この視点の転換により、中国仏教の発展と伝播をより包括的に理解することが可能となった。異なる地域間のつながりを強調することで、国際的仏教ネットワークの多様性が浮き彫りとなり、仏教のグローバル化過程に対する理解が拡大している。

次に、仏教寺院や仏教者間の系譜関係の影響についてである。本報告は、東南アジアにおける中国仏教寺院や共同体の形成が、主に中国本土南部の寺院系譜に基づいていることを強調している。この観察は、仏教の地理的移動における系譜の重要性を明らかにするものである。系譜関係は、仏教の地域間伝播を促進しただけでなく、安定した社会的ネットワークを形成し、現地における仏教発展の支えとなった。

第三は、地域を超えた社会的つながりである。共通の系譜的背景を持つことで、これらの共同体は地理的境界を越え、地域を超えた社会的つながりを形成した。こうしたつながりは、仏教共同体の結束を強めるとともに、さらなる社会的・宗教的資本を生み出し、仏教の国際的伝播の基盤を築いた。

最後に、移民の影響である。ライ教授は、新たな移民が既存の地域的仏教ネットワークを豊かにしただけでなく、地域を超えた仏教ネットワークに新たな機会と可能性をもたらしたことを指摘している。この視点は、現代の仏教ネットワークにおける移民の重要な役割を強調するとともに、仏教伝播過程の動態性と適応力を浮き彫りにしている。

ライ・ロンダオ教授の報告は、革新的な研究視点と豊富な実証資料を通じて、現代中国仏教の国際的伝播を理解するための新しい洞察を提供している。地域性、系譜関係、そして移民の影響に関する分析は、仏教史理解を深めるだけでなく、現代仏教学研究にも重要な示唆を与えている。

ジュスティン・ライジンガー (Justin Ritzinger) 氏は、「Egalitarianism and its Antagonism: A Case Study of an Independent Lay Buddhist Community in Contemporary Taiwan (平等主義とその対抗性——現代台湾における在家仏教共同体の事例研究)」を題として発表した。ライジンガー氏の報告は、台湾における在家仏教グループの現状を深く分析し、重要な洞察を提供するものである。その中には、特筆すべきいくつかの点があり、さらなる議論に値する。

まず、歴史的連続性の強調である。本報告は、台湾の在家仏教が中華民国初期の伝統を受け継いでおり、その発展における歴史的厚みを示している。ライジンガー教授は、一九四九年以降、中国本土ではこうしたグループが弾圧されたのに対し、台湾では法的保護が与えられ、宗教団体が維持され、社会的安定が促進された点を強調する。

次に、在家仏教の独立性の理解である。本報告は、台湾の在家仏教が相対的に独立していることを明らかにしている。これは、出家僧団に依存しない組織構造や経済的自立によって示される。在家信者の高い教育水準と経済力が、教義解釈や社会的実践における自律性を高めており、在家者が仏教実践において能動的で中心的な役割を担っていることを示すものである。

第三に、グループ内の平等性である。出家僧団の階層的構造とは異なり、在家仏教グ

グループでは会員間の平等な地位と権利が重視されている。これは、現代社会における平等や個人の価値観の重視を反映しており、グループ内の調和と協力を促進する要因となっている。

最後に、革新的な方法論の採用である。ライジンガー氏は人類学的手法を用い、参与観察やフィールドワークを通じて一次データを収集し、研究をより真正かつ説得力のあるものとしている。この方法は豊富なデータを提供するだけでなく、報告をより人間的で実践的なものに行っている。

ジュスティン・ライジンガー教授の研究は、台湾の在家仏教を理解する上で貴重な視点を提供している。歴史的背景、組織的独立性、内部構造、研究方法論に関する分析は学術的価値が高く、台湾における仏教理解を深めるのみならず、他地域の仏教学研究に対しても示唆を与えるものである。

第二回講演会は、令和七年（二〇二五年）二月八日（土）、本学八号館四階国際研究センター会議室にて開催された。以下の五名の研究者が発表を行った。

陳継東（青山学院大学教授）：「鈴木大拙と中国仏教：民族性をめぐる言説の考察」

沈庭（武漢大学准教授・東北大学訪問学者）：「民国期大藏経編纂と国家主義」

譚皓（天津大学准教授）：「近代日本の仏教者による中国留学と日中仏教交流：留学史の視点から」

道礼（台湾大学博士課程・東京大学東洋文化研究所訪問学者）：「釈迦の本源への回帰—近代中国におけるインド仏教史の形成と日本との交錯」

坂井田夕起子（愛知大学客員研究員）：「アジアの世界仏教運動と中国の仏教」

陳継東の報告では、鈴木大拙の『支那仏教印象記』（一九三四）および「仏教とシナ民族性」（一九三五）をもとに、鈴木大拙の中国仏教に対する認識を考察した。要約すると、鈴木大拙は当時日本で流行していた「中国仏教堕落論」に賛同せず、むしろ、中国仏教の堕落を指摘する立場の人々が批判する点は日本仏教にも存在し、場合によっては日本仏教よりも優れていることさえあると反論している。鈴木の見解によれば、現実の中国仏教のあり方は堕落ではなく、中国文化の特質に適応し、中国民族性に同化した結果として現れたものである。

沈庭氏の報告は、中華民国期に編纂された大藏経の一つである『普慧大藏経』に関する考察である。『普慧大藏経』の刊行は一九四三年に始まり、編纂作業は一九五五年までに大まかに終了したが、完全には完結せず、現在においても印刷部数は少なく、認知度は低い。また、編纂が随意的に行われたため、一部を完全な形で収蔵することが困難であった。そのため、1998年になってようやく比較的体系的に整理された形で出版されることとなった。現在の学界においても、『普慧蔵』に関する研究は限られており、特

に一九八〇年代以前の日本や台湾の仏教学界ではほとんど研究がなかった。蔡丕霖による研究によれば、当時の研究は『普慧藏』に収録された宗教典籍（主に『祖燈大統』）やその中の『祖燈録滙』の考察にとどまり、深い分析には至らなかった。また、藏經自体に関する専門的研究は非常に少なく、簡単な紹介や概略にとどまるものがほとんどであり、分析・議論は依然として不足しているのが現状である。

しかし、『普慧藏』の編纂は、中国における日中戦争および国共内戦という二つの戦争時期をまたぐ中で行われた。このことは、近代中国仏教界が藏經の編纂を継続しようとする強い熱意を持っていたことを示している。また、『普慧藏』に収録される經典の多くは独特な特徴を備えており、近代民族主義、中国仏教運動、政治・戦争・国外要素の影響を強く受けている。

一般的な大藏經とは異なり、『普慧藏』は中国仏教史上初の「翻訳」ではなく、既存の南伝大藏經と融合する形で収録されている。これは、戦時中の一九四三年に編纂が開始されたことと深く関連しており、従来の大藏經が持つ特徴とは異なる変容が見られる。このことは、一種の戦時下での変革と解釈できる一方で、新しい仏教の出現とも捉えられる。ある見方では、『普慧藏』は南伝仏教と漢伝仏教の融合という新たな試みであり、近代中国仏教界が伝統仏教と新しい仏教の交流を図ろうとした歴史的産物である。そして、この融合は単なる形式的なものにとどまらず、中国近代仏教が「仏陀の真正な教え (the authentic teachings of the Buddha)」および「仏法の本質 (the essence of the dharma body)」をどのように解釈するかという新たな視点を提供している。

道礼氏の報告は、近代中国におけるインド仏教の歴史叙述および仏教学研究がどのように確立されたか、そしてその過程で日本仏教学術からどのような影響を受けたかを考察するものである。従来の研究は、インド仏教が中国に伝来した後、いかに受容され、中国化した仏教へと変容していったかに重点を置いてきた。しかし、一九四五年以前におけるインド仏教史の近代的叙述や歴史書写については、中国が欧米および日本とどのように連結され、そこから形成された全体的な発展脈絡がどのようなものであったかを論じた研究は乏しい。特に、史学的な枠組みを提供した日本仏教学術の影響は看過できない。

この観点から、まず西洋における仏教研究を検討する。西洋の仏教研究は当初、欧米におけるインド学の一領域としてのサンスクリット研究に属しており、サンスクリット仏典の収集・整理・翻訳を通じて、伝統的な東アジア仏教とは異なる近代的仏教文献学の体系を形成していった。次に、明治維新时期に南条文雄がオックスフォード大学に留学し、マックス・ミュラーのもとで比較宗教学とサンスクリットを学び、ヨーロッパの近代的仏教研究方法を日本へ移入した経緯を明らかにする。これにより、近代日本仏教に

における西洋学術の基盤が確立されたのである。さらに、楊文が南条との交流を通じて、近代中国におけるインド仏教研究の基礎的資源をいかに確立したかを検討する。

最後に、太虚および印順法師の研究に焦点を当てる。両者は『解深密経』に基づく「仏陀在世時の三時判教」に依拠しつつ、インド仏教の時代区分と判教思想を提示した。印順法師の仏教史研究の理念は、釈迦牟尼仏の本懐へ立ち返ることを重視する点にある。すなわち、仏教の本源であるインド仏教の歴史的興亡と思想の正確な理解により、中国仏教の歴史を真に貫徹することが可能であると主張している。

譚皓氏の報告は、東本願寺によって中国に派遣された留学生（僧）を中心に、近代日本の仏教者による中国留学を歴史的視点から考察し、日中仏教交流の意義と影響を検討するものであり、近代東アジアの宗教的ネットワークの変遷を探る内容である。

まず、「留学」「留学生」「留学僧」に関する概念定義について検討した。『辞海』（二〇〇九年版）では「留学」を「留居他国学习」と定義し、日本の遣唐使や遣隋使、近代の官費留学生派遣を例として挙げている。『漢語大詞典』（一九九七年版）では「留学」を「留居他国学习研究」、留学生を「他国に留まり学ぶ学生」と説明している。一方、「留学僧」は「僧籍をもって留学した者、または僧籍取得を目的として留学した者」と定義される（小島勝・木場明志、一九九二）。譚氏の研究では、「留学生」と「留学僧」を区別し、後者を「宗教目的を持つ留学生」として扱っている。

次に、近代日本における中国留学の沿革について述べる。第一期は幕末期（一八六〇年代）で、黒船来航を契機に海外留学生の派遣が始まった。当初は欧米諸国が主な留学先で、中国への留学は通訳養成の必要性から開始された。第二期は明治初期（一八七一～一八九九年）で、一八七一年に『太政官日誌』で中国留学生派遣が正式に記録され、一八八三年には『清国北京留学生規則』、一八九四年には『外務省留学生規則』が制定され、留学生派遣制度が確立した。第三期は二〇世紀初頭以降で、外務省、陸軍省、海軍省、文部省、農商務省などが異なる目的で留学生を派遣した。留学生は、言語通訳型、軍事偵察型、商業調査型、学術研究型の四種類に分類される。

第三に、東本願寺による中国留学と教育活動である。仏教者の中国留学の中でも、特に東本願寺の活動が重要である。例えば、小栗栖香頂（一八三一～一九〇五）は一八七三年に長崎を出発し、上海経由で北京に至り、龍泉寺清慈庵で中国語を学んだ。雍和宮でラマ教を学び、五台山を訪問。帰国後、再び中国へ渡り、東本願寺上海別院を設立し、中国仏教界との交流を深めた。また、東本願寺は上海に仏教学校を設立し、中国人教師を雇いながら日本人僧侶の教育を行い、北京語・南京語学習を重視した（『清国 교 校 条 規』）。

第四に、近代日本の仏教者による中国留学の意義と影響である。日本の仏教者による

中国留学は、次のような影響を与えたとされる。(1) 日中仏教交流の深化。小栗栖香頂と本然、南條文雄と楊文会など、日中仏教者が相互に学ぶ機会が生まれた。(2) 近代仏教の変容。日本の仏教者が中国での経験を持ち帰り、日本の仏教改革や国際化に貢献した。(3) 戦争と仏教者の関与。一部の仏教者は日中戦争期に「支那通」として軍事活動に関与しており、宗教と戦争の関係を再評価する視点が求められる。

第五に、研究の課題と今後の展望である。示された課題は、(1)「留学生」のイメージと実態の乖離。日本の留学生は単なる学問的交流者ではなく、政治的・軍事的な役割も担っていた。(2) 留学生の立場と認識の問題。日本国内では留学生が「文化交流の架け橋」と評価される一方、中国側では「スパイ」と見なされることもあった。今後は、日中双方の視点から留学史を再検討し、宗教者の活動が持つ多層的意味を明らかにすることが求められる。

以上のように、近代日本の仏教者による中国留学は、単なる学問的探求にとどまらず、日中仏教交流や政治・軍事においても重要な役割を果たした。譚氏の研究は、仏教者の中国留学の歴史的意義を再考させるものである。

坂井田氏の報告は、アジアにおける世界仏教運動における中国仏教の関わり方を考察するものである。特に、中華人民共和国と中華民国（台湾国民党政府）との対立の中で、両側に存在する仏教組織の政治利用の状況が明らかにされた。

中国において、近代世界仏教運動を最初に提唱したのは太虚である。太虚の死後、中国大陆では内戦が勃発した。一九四九年に中華人民共和国が成立すると、中国仏教会は台湾へ移転した。世界仏教運動は、セイロン（スリランカ）、インド、ビルマ（ミャンマー）などの上座部仏教諸国により展開され、彼らは「世界仏教徒連誼会」（略称：世仏連）を設立し、長期的な運動推進体制を整えた。

建国前後の中国共産党は、中国仏教界を必ずしも重視していなかった。当時の巨賛は次のように述べている。

中国社会は仏教を封建的伝統と密接に結びつけたものとみなしている。我々は現在得られた正当な立場を利用し、釈迦牟尼仏の精神を真に発揚し、生産に従事し、社会と人民に奉仕すべきである。そうすれば将来に展望があるが、そうでなければ淘汰されるのみである。

一九五〇年九月、中国の仏教徒は「現代仏教社」を結成し、1953年に改組して「中国仏教協会」となった。彼らは仏教界の改革を通じて海外の仏教徒と連携し、生存の道を模索した。

一方、台湾では戒嚴令下において中国仏教会も困難に直面した。中国国民党は僧侶と共産党員との関係に警戒心を抱き、台湾の中国仏教会は「脱日本化」「中国化」政策を

推進した。国際舞台で「中国仏教」の地位を確立することが、国民党の独裁体制下で仏教徒が生存する一つの方策であった。

本報告では、一九五〇年代から一九六〇年代にかけて、中国仏教徒が世界仏教運動をどのように認識し、その活動が中国政府の政策とどのように関係したかについて論じられた。一九五〇年代における日本と中国の仏教交流は、日中友好活動や平和運動を通じて発展し、日本側の積極的な招請は、対中封鎖政策をとるアメリカに対抗するためのものであり、国際的な宣伝活動に有利に作用した。

他方、中国政府は、仏教をはじめとする東方宗教を、植民地における被圧迫民族の宗教と認識しており、中国における宗教政策は周辺アジア諸国に影響を及ぼすものであった。中国は影響力を拡大し、周辺諸国と団結するために、中国仏教協会名義で積極的にミャンマー、ネパール、インドなどにおける仏教交流に参加し、世仏連の活動にも関与した。

しかし、一九五〇年代末から中国と周辺仏教国との関係は悪化し、仏教の対外活動も変化を余儀なくされた。一九六三年に世仏連本部がタイに移転すると、中国はその背後にアメリカの影響があるとみなし、アメリカおよび世仏連に対する公然たる批判を展開した。これに対抗する形で、中国仏教協会は独自にアジア仏教大会を開催し、世仏連に対抗するとともに反米帝国主義を鮮明に打ち出した。

一九六六年八月、文化大革命が始まると、中国仏教協会の活動は全面的に停止し、対外交流も中断された。一九七二年に中国と日本の国交が正常化されると、趙樸初は日本仏教徒の訪中を呼びかけ、一九七三年には日本仏教徒の訪中が再開された。すなわち、冷戦期の中国仏教徒による対外活動は、アメリカとの対立構造に大きく左右されていたのである。

一九八四年、中国仏教協会と台湾の中国仏教会はともに世仏連の会議に参加した。これは冷戦の終結を象徴するとともに、中国仏教徒と世界仏教徒の交流が新たな段階に入ったことを示している。

本研究プロジェクト「近代中国仏教と国民国家」には八名の学者が共同で参加し、多様な視点からの検討が行われた。その成果として、多くの新たな研究知見が提示され、今後の研究を一層深化させるための基盤を提供することができた。加えて、限られた研究費の中で複数の研究者による共同研究を実施できた点も、本プロジェクトの成果の一つとして特筆される。